教員養成における体験学習の意味

—韓国保育研修を通して“平和”に関する考えがどう変化するか—

野田 淳子
（宝仙学園短期大学）

【問題】
教員養成においては、実習をはじめ、体験を通じていかに学びを深められるかが問われる。本研究では、学生が長年に渡って実施してきた「韓国保育研修」の中心的な教育テーマである「平和」という概念についての考え方が、研修での体験を通じていかに変化するかという問題を検討する。

韓国保育研修の概要
本学の韓国保育研修は「偏見を持たずに子どもを育つことが保育者の使命であり、保育者はこだわりのない、豊かな世界観を持たなければならない」という理念のもと、国際的な視野に立って子どもの教育・福祉・平和について体験的に考えるため、韓国の人々と“偏”として交流し、「板門店」など平和教育に関わる“場”に立ち、民族や文化、教育や歴史の違いを知ることにより、保育における平和教育の在りかたを学ぶことを目的としている。

保育学科2年次専門教育科目「国際理解教育」演習として、具体的なテーマに①幼稚園実習 ②保育者養成校の学生との交流 ③戦争と平和、社会福祉について理解を深めるための特別講義、板門店見学等を行い、研修中にもグループミーティングやシンポジウムといった振り返りの機会を設けなど、24日間で毎日カリキュラムの充実を図っている（指田・西海・由田・野田,2007）。

本研究の焦点
なかでも国連軍と北朝鮮軍の共同警備区域である板門店の見学では、戦争の悲惨さや平和の大切さを、単なる知識としてではなく、文字通り“実感”するカリキュラムである。そこで本研究では、「平和」をめぐる問いとして（1）「自分は今、平和な生活を送っていると思うか」（2）「世の中は今、平和だと思っているか」という3つの問いを設定した。本研究は前者2つの問いについて、研修出発前と板門店見学後への回答の変化を検討する。

【方法】
研修出発前と板門店見学後には、（1）自分は平和、（2）世の中は平和と捉える程度について①非常にそう思う②少しそう思う③あまりそう思わない④まったくそう思わないの4段階で評定させ、その理由づけを求めめた。今回は研修出発前と板門店見学直後の評定値に注目し、両方について回答が得られた54人のデータを分析する。

4段階の評定値について、被験者内2要因の分散分析を有効水準5%で行った。すなわち、平和である対象（自己・世の中の二水準）×時期（出発前・見学後の2水準）の2要因である。

【結果とまとめ】
分散分析の結果、対象の主効果（F(1.53)=277.73, p=0.001）、および対象×時期の交互作用（F(1.53)=15.63, p=0.001）が有意であった。交互作用については単純主効果の検定の結果を、図1に示す。まず出発前・出発後ともに「世の中」のほうが「自分」よりも「平和でない」ととらえていた。また、「自分」に関しては見学後よりも出発前のほうがより「平和でない」、「世の中」に関しては出発前よりも見学後のほうがより「平和でない」ととらえている。すなわち、板門店での体験を通じて、自分がいかに平和な生活を送っているか、対象的に世の中はいかに平和でないかを実感し、平和に関して自分が置かれている状況のギャップをより強く感じという結果が得られた。その理由については今後、自由回答の検討を進めて明らかにしていく予定である。

図1 どの程度平和でないと思うか

【引用文献】指田利和・西海聡子・由田新・野田淳子（2007）保育者養成における平和教育—韓国保育研修—、全国保育士養成協議会。